

人麻呂歌集略体の寄物陳思歌。上三句の各冒頭で一人称が繰り返されているが、これは意識的な選択かもしれない。歌のよさとは無関係とされている(評釈篇)。第二句は、仮名書きの例に基づいて旧訓ワがかわりにアガと訓まれることが多いので(『新編全集』『新大系』など)、旧訓での頭韻が減った。しかし一人称を三つ載せる短歌は集中四例のみ、上の各三句に含む歌はこれだけである。歌の中心が自己と他者との関係であることを考えれば、この繰り返しは表現性を持つといえよう。原文にあるように、離れた「我」セコを思う「吾」気持ちちが、「吾」ヤドの草にまでに現れるのである。よく比較される「君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸の簾動かし秋の風吹く」(4・四八八、額田王)では、家の中の女が風と接することで、一種 外界との関係を得るのだが、この歌では草が、待つ女と一緒に庭を含むヤドという空間にこもり、ウララル状態で外との接触が絶えて久しいことを示す。ウララルの多くの例は人間が憎然たることを指すが、植物の状態となっているのは、人麻呂歌集の歌のみで、この歌の他には、「行く川の過ぎにし人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の檜原は」(7・一一九)と「山ささの白露重みうらぶれて心に深く我が恋止まず」(11・二四六九)がある(歌注)。二四六九歌は序歌だが、この歌と同じくウララルが人間と植物、両方の主語をもつ。歌の主旨は「草しおれているのを見て、自分に同情しているのだと言ったもの」(『新編全集』)とされるが、草が「同情」するとまで想定する必要はない。「物思ふと寝ねさ起きたる朝明にはわびて鳴くなり庭つ鳥さく」(12・三〇九四)と同様に、恋が周辺の現象にまで及んでおり、またサへの添加の機能によって、暗示された人間の情が強調されていると見なすべきである。

【口訳】私のある人のことを 私か恋しているから 私の家の庭の草までも 物思ひしてしゅんぼりしてきた

たらつねの 母が養ふ蚕の 繭隠り 隠れる妹を 見むよしもかも (11・二四九五)

【原文】足常 母養子 眉隠 隠在妹 早依嶋
 【口訳】(たらつね) 母親が飼育している 蚕が繭に隠っているように 家に閉じもっているあの子を 見る方法があったらよいのに

人麻呂歌集略体の寄物陳思歌。「隠れる妹」は「片生ひの時ゆ……髪たくまでに並び居る家にも見えす虚木綿の隠りて居」る(9・一八〇九)菟原処女のように家の中に閉じもっている未婚の若い女性をさす。集中一四例の結句は「秋田刈る仮塵作り慮りしてあるらむ君を見むよしもかも」(10・三三八)とあるように、現在離れている人との再会に対する願望を表すことが多い。しかし、ここではコモルと合わせて視覚的な面が強調されており、いまだ逢ったことのない娘を見る機会を願う表現と解釈できる。上三句の序詞は、蚕の蛹がすっかり繭に閉じもっているように、という意味だが、第一・二句は「たらちねの母に障らばいたづらに汝も我も事そなるべき」(11・二五二七)や「小山田の鹿猪田守ること母し守らすも」(12・三〇〇〇)などのような、娘を敵しく見張って男との関係を阻止する母のイメージと合わせて、コモルイモに具象性を与える。このような表現性は原文にも認められる。「母」にかかる枕詞「足常」はこの一例のみなので、タラチネから転じた語形(『新考』)としても、ただ「足常」という字をタラチネに当てたものとしても考えられる。訓みかたはさておき、その書記は「常に十分足りている意味を示唆する。(中略)娘の養育に対して配慮の行き届いている印象を文字面から与える」と指摘されている(『全注 卷十一』)。また、『代匠記』が提案する詩語「蛾眉」との関係については、直接的な影響が和歌に少ないが(松浦安久「蛾眉考」『詩語の諸相』研文出版、昭56)「玉匣開キチ形ヲ鑿ミ……聊カ出繭ノ眉ヲ為ス」(何遜「詠鏡」『玉台新詠』卷五)のような表現を介して、第三句の「眉」＝「繭」という借訓が「妹」の美のイメージを付け加えたとみえる。この両方の文字表現は、歌の中心である上三句の序詞の効果を強める。

(デヴィド・ルリ)

我が背子に 我が恋ひ居れば 我がやどの 草さへ思ひ うらぶれにけり (11・二四六五)

神野志隆光(こうのしたかみつ)
東京大学大学院教授。
一九四六年和歌山県生まれ。
坂本 信幸(さかもとのぶゆき)
奈良女子大学教授。
一九四七年高知県生まれ。

企画編集 神野志本 幸光
発行者 廣橋研三
発行所 和泉書院
〒568-0002 大阪市天王寺区上汐五二八
電話 067511515
振替 0025012055
印刷／製本 亜細亜印刷

二〇〇五年一月十五日 初版第一刷発行◎

セシナ
万葉の歌人と作品 第十二巻 万葉秀歌抄

第十二回配本

ISBN 4-7576-0334-7 C1395